

明治期における二松學舎の漢学教育

——二十年代後半から三十年代を中心として

清水 信子

はじめに

明治期における二松學舎の漢学教育については、「二松學舎舎則」「二松學舎規則」、「二松学友会誌」「二松学報」、また『二松學舎六十年史要』（二松學舎、一九三七）『二松學舎百年史』（二松學舎、一九七七）など各種二松學舎関係史料により、学科課程、課目、また講師陣などその概要は知られる。しかし実際の講義内容、塾生の受講状況などその具体的な様相については、これまで明らかになっていなかった。それを知るためには当時の在塾生の講義筆記など旧蔵資料が有用であろう。それら二松學舎関係者の資料については、二松學舎大学私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（SRF）「近代日本の「知」と形成と漢学」の一環として収集が進められているが、そのひとつに加藤復齋（名は信太郎、字近義、復齋は号、また室号為春堂）の旧蔵資料がある。復齋は明治二十年代に二松學舎に入

塾し、のち助教、幹事となり、明治三十五年（一九〇二）頃に塾頭になった人物である。その旧蔵資料には二松學舎在籍時の講義筆記類や講義の際に使用したとみられる版本類が数多く残され、当時の二松學舎の講義の様子をうかがい知ることができ。そこで本稿では加藤復齋の旧蔵資料を手がかりとして、復齋の二松學舎在籍時期である明治二十年代後半から三十年代を中心とした二松學舎における講義、漢学教育の実際を明らかにしていく。なお本稿における人名表記は姓号を基本とした。

一、明治期における二松學舎の学科課程

二松學舎は、明治十年（一八七七）十月六日、三島中洲の長男桂が東京府知事楠本正隆宛に「私立漢学設立願」を提出し、同八日に認可され、創立される。なお、同十日に伝達されたことにより、創立記念日は十月十日としている。

「私立漢学設立願」には「学校位置」を「第三中学校区内」、「学科」を「漢学」とし、中学として申請して認可されたが、明治五年（一八七二）に発布された「学制」第三十条によれば、

当今中学ノ書器未タ備ラス此際在来ノ書ニヨリテ之ヲ教ルモノ或ハ学業ノ順序ヲ踏マスシテ洋語ヲ教ヘ又ハ医術ヲ教ルモノ通シテ変則中学ト称スヘシ

但私宅ニ於テ教ルモノハ之ヲ家塾トス

として当時、洋学塾、医学塾は正規の中学に対し「変則中学」とされており、漢学塾の二松學舎も同様に「変則中学」として認可されたと考えられる。

明治十年代前半の二松學舎の学科課程は、十一年（一八七八）二月に舍則が改められ、「級」と「課」に分けた級課制がとられた。第一から第四の四級に分け、さらに各級を三課に分け、第四級第三課から第一課第一級へと毎年二回の試験により進級した。これは中洲が変則中学から正規の中学とすべく「学制」の

第四十八章 生徒ハ諸学科ニ於テ必ス其等級ヲ踏マシムル

コトヲ要ス、故ニ一級毎ニ必ス試験アリ、一級卒業スル者ハ試験状ヲ渡シ、試験状ヲ得ルモノニ非サレハ進級スルヲ得ス（傍線引用者）

第四十九章 生徒学等ヲ終ル時ハ大試験アリ小学ヨリ中学

ニ移リ中学ヨリ大学ニ進ム等ノ類

に準拠したことによる⁴。しかしまた明治十四年（一八八一）には、府県に対する「中学校教則大綱」（文部省布達）第二十八号）が定められ、中学校教育に関する準則を設け、新たな中学校の資格が確立したことにより、二松學舎は「私立各種学校」となった。

級課制となった当初、明治十一年の講義は全級課共通して『書経』『莊子』『文章軌範』等が行われ、第四級第三課および第二課では素読を主とした。そして第三級が修了すると『論語』『春秋左氏伝』『唐宋八家文』等を輪講した⁵。それは翌十二年（一八七九）に改正され、第四級第二課から始まり、講義課目は以下の通り各級課別に定められた⁶。

第四級 第二課 四書素読

第一課 五經素読（或ハ日本外史、八家文ヲ以テ、之ニ代ルモノ妨ケナシ、）

第三級 第三課 日本外史、十八史略

第二課 日本政記、元明史略

第一課 清史概要、席上復文

第二級 第三課 正文章軌範、席上記事文

第二課 孟子、史記

第一課 論語、左伝

第一級 第三課 唐宋八家文、席上議論文并二詩

第二課 韓非子、大日本史、大学、中庸
第一課 資治通鑑、宋元通鑑、詩経、書経、莊子
級課制は明治十七年（一八八四）に廃止され、一、二、三の
三級制となり、級ごとに以下の講義がなされた。⁷

三級 日本外史、日本政記、皇朝史略、十八史略、論語、孟子、文章軌範

二級 唐宋八家文、論語、大学、春秋左氏伝、戦国策

一級 詩経、韓非子、荀子、莊子、列子、礼記、易経、書経

明治十年代後半から二十年代の二松學舎の塾生数について『二松學舎百年史』によれば、経済界の不況、資本主義発達に伴う洋学の優位性などにより、明治十八年（一八八五）頃から同二十年代前半にかけて塾生は減少傾向にあったが、同二十八年（一八九五）の日清戦争の勝利により東洋学が復興し、塾生も増加してきた。⁸ また翌二十九年、中洲が東宮御用掛を命ぜられ東宮侍講に任ぜられると、またさらに塾生は急激に増加したという。

明治二十年代の学科課程は、前半の詳細は不明ながら、後半の二十八年九月に「二松學舎規則」が定められ、新たに「尋常部」「高等部」の二部に分けられた。尋常部が年三期二年制、高等部が年二期三年制で、「高等部ハ文学ノ高尚ナルモノヲ教ヘ、尋常部ハ平易ナルモノヲ授ケ以テ高等部ニ入ルヲ備ト」（第二章 学科課程 第二条）し、「課目」は修学内容別に尋常

部は「素読」「講読」「訓点」「訳文」「作文」の五課、高等部は「経書」「歴史」「子集」「文法」「詩賦」「古典」の六課で、各々教材とする文献を定め講義がなされた（表1）参照。加藤復斎はこの課程の時期に受講している。

この学科課程によれば初等課程にあたる「尋常部」では「素読」「訓点」という漢文訓読の基礎から始まり、「講読」「訳文」「作文」ともつばら漢文読解の習熟に努め、内容理解、解釈については高等課程にあたる「高等部」において、「文法」で引き続き漢文読解能力を養いつつ「経書」「歴史」「子集」「文章」「詩賦」「古典」と分野別に学んでいったとみられる。また課外で、

第四条 高等部ノ詩文ハ毎月十日二十五日ヲ以テ添削日トシテ、一人一回ニ文ナレハ一篇、詩ナレハ五首ヲ限リトス。毎回詩文題ヲ揭示スト雖モ自撰ノ題ニテ作ルモ妨ケナシ。但シ文一篇四百字位、古詩ハ三篇ヲ限リトス。

第五条 尋常部生徒ニシテ漢文ヲ作ル能ハサル者ノ為メニ、漢文和訳、和文漢訳ノ外、更ニ毎週仮名文ノ添削ヲ為ス。但シ一人一篇ヲ限リトス。

として、塾生が提出すれば高等部では詩文、尋常部では漢文和訳、和文漢訳、仮名文の添削が受けられた。なお、加藤復斎の旧蔵資料には明治十四年（一八八一）から翌十五年、同二十四

【表1】

明治二十九年「二松學舎規則」第二章 学科課程 第三條 課程

尋常部課程表		課目		素読		講読		訓点		訳文		作文	
年		期		期		期		期		期		期	
古典	詩賦	文章	文法	子集	歴史	経書	課目	第一年	第一年	第一年	第一年	第一年	第一年
		漢文ノ書牘序記	経書及ヒ子集ヲ用フ	唐宋八大家文	大日本史	論語	第一期			俗用往復文			
		全上	全上	全上	全上	左伝	第二期			全上	漢文和訳		
		漢文ノ論説	全上	孫子 韓非子 呉子	資治通鑑	中庸	第一期			片仮名交文ノ書牘序記	全上	講読用書ノ内	
		全上	全上	荀子 近思録	全上	詩経	第二期			全上	復文	全上	
		漢文ノ策論表状	全上	管子 莊子	宋元通鑑	書経	第一期			片仮名交文ノ序記論説	和文漢訳	全上	
		全上	全上	老子 伝習録	全上	周易	第二期			全上	全上	全上	
		律詩	全上										
		唐六典	全上										
		周官	全上										
		制度通	全上										
		五七言絶句	全上										
		文献通考一班	全上										
		素読	四書若クハ十八史略										
		五経若クハ日本外史											
		日本外史											
		元明史略											
		文章軌範											
		皇朝史略											
		孟子史記											

年（一八九一）から三十年（一九〇一）の作詩文の課題を筆記した『松巒詩文題』が残る。初期の十四年十五年部分は三島中洲自身の手控え『詩文課題』から移写したもので、二十四年以降の詩文が復斎自身に関わるものである。

当該期間の講師陣については、明治二十九年（一八九六）刊『二松学友会誌』（以下略『学友会誌』）第一輯の「彙報」に「授業は毎八時間以上にて其受持は左の如し」として、

中洲夫子 詩経 唐宋八家文 伝集録 孫子 荀

子 孟子〈輪／講〉

細田謙蔵氏 春秋左氏伝

山田準氏 莊子 続文章軌範

池田四郎次郎氏 論語 史記本紀

三島廣氏 日本政記

河合輓次郎氏 史記列伝 正文章軌範 質問素読

速水柳平氏 詩〈席／上〉 復文 訳文 日本外史

加藤信太郎氏 文〈席／上〉

和泉良之助氏 十八史略

以上の外詩文方は川北梅山翁、久保雅友氏兩人にて担任せらる。

と、当該年の講師陣が掲載される。加藤信太郎はすなわち復斎で、作文、復文を担当していた。

明治三十年代に入ると、三十三年（一九〇〇）には三月に

「教員免許令」（勅令第百三十四号）、六月に「教員検定ニ関スル規程」（文部省令第十号）が制定された。また十二月には文部省が高等教育会議において師範学校中学校令の改正案を提出し、従来の国語漢文科を改め国語科とし、国語科の下に漢文を教授することを諮問し、中学校での漢文科を廃止する、いわゆる「師範中学漢文科名存廃問題」が起こった。これに対し二松學舎では翌三十四年二月、細田劍堂（謙蔵、一八五八〜一九四五）¹¹を中心として貴衆両議院に「師範学校中学校漢文科名称存置請願書」を提出した。これらの影響は少なくとも、二松學舎では入学者も減少し、その対策の必要があった。まず、「教員免許令」「教員検定ニ関スル規程」については教員免許資格取得のための文部省教員検定試験、いわゆる文検に対応するべく、三十三年七月に国語科を設置し、翌三十四年四月には「二松學舎規則」を改定し、「文部省制定ノ師範中学校等ノ国語漢文科検定試験ニ応スルコトヲ得ヘキ学力ヲ養成ス」（第一章 学科課程 第一条）るため新たに「受験科」を設けた。これにより、明治期の二松學舎は「中学校」としてではなく、文検に対応する学力養成機関という一面を持った「私立各種学校」として進展することとなった。

新たに「本科」「受験科」の二科制となり、各修学期間は本科は従前通り尋常部二年（年三期制から二期制に変更）、高等部三年の二部五年、受験科は三年で各修学課目も異なり、本科

【表2】

明治三十四年「二松學舎規則」第一章 学科課程 第二条 課程

詩文話	解題	文学史	講読	高等部		文章	講読	素読	尋常部		本科課程表
				課目	年 期				課目	年 期	
詩法 句法 篇法 文字 諸體	經史集	上古史	論語 資治通鑑 大日本史 唐宋八家文	第一期	第一年	俗用尺牘文 假字交記事文 文法口授	日本外史 十八史略 蒙求 小学外篇	日本外史 十八史略 四書	第一期	第一年	本科課程表
				第二期	第二年				復文 假字交記事文 文法口授	日本外史 十八史略 小学内篇	
同上	經史子	中古史	孫子 戰國策 左傳 宋元通鑑 荀子	第一期	第二年	復文 假字交序記論說 文法口授	元明史略 孝經 日本政記		第一期	第二年	
				第二期	第二年				和文漢訳 假字交序記論說 文法口授	史記列傳 正統文章軌範 孟子	
同上	同上	近世史	管子 莊子 列子 書經 詩經	第一期	第三年						
				第二期	第三年						

文章詩歌		文典		解題		文学史		法制	講読	課目	受験科課程表	古典	詩賦	文章	
年 期												古典	詩賦	文章	
近世文歌諸体	絶句	和文漢訳 漢文和訳	国文典	漢文典（口授）	国書	漢書	本朝文学史（上古史／中古史）	支那文学史（上古史）	本朝法制史（口授）	方丈記 保元平治物語 土佐日記 古今集 駿台雑話	唐宋八家文 荀子 孫子 史記列伝 孟子 論語	第一年	制度通	絶句	漢文ノ書牘序記
													文献通考一班	絶句	同上
中古文同上	律詩	序記論說	同上	同上	同上	同上	同上（中古史／近世史）	同上（中古史）	同上	徒然草 十六夜日記 平家物語 新古今集 增鏡	唐宋八家文 史記列伝 左伝 大学 韓非子 金元明清文 資治通鑑	第二年	唐六典	律詩	漢文序記論說
													唐六典	同上	漢文序記論說題跋
中古文及古文同上	古詩	序記論說題跋	同上及語学史	同上	同上	同上	同上（近世史）	同上（近世史）	同上	祝詞 宣命 大鏡 枕草子 万葉集 源氏物語	左伝 資治通鑑 国語 中庸 書經 礼記 老子 莊子 金元明清文 文選	第三年	三礼	古詩	漢文序記論說表状
													三礼	同上	同上

の課目も改訂された〔表2〕参照。

二、加藤復斎と旧蔵資料

(一) 加藤復斎

加藤復斎については、生卒年、入塾年など二松學舎在籍以前についての詳細は不明ながら、上京以後の明治二十四年（一八九一）から同三十三年（一九〇〇）については日記が残されている。¹²そこには聴講の記録や読書、購書、書写した文献などの学習状況から交流した人物、出向いた場所など日常が記されている。また明治二十九年（一八九六）以降については、『学友会誌』の「彙報」にその名「加藤信太郎」が散見し、それらの記事から消息を知ることができる。以下、日記、『学友会誌』により、上京以後の事績をたどっていく。

復斎が郷里陸前遠田郡涌谷から上京し二松學舎に入塾したのは、明治二十四年前後と思われる、その当時の様子については、同年十月から翌二十五年十一月二十七日まで続く「在京日志」と題された日記に見える。その『在京日志』には二松學舎に関する記述は「在塾」とあるばかりで、外部の講演を聴講したり、知人を訪ねたりと各所に向いた記録が中心である。

たとえば、十月、十一月の日記（原文無点、以下同）には

三日 晴。十一時訪郷友佐藤静亮君於神田錦街之寓。午後一時共聴重野成斎論語新古注異同之論、高島嘉右衛門周易活断（高島氏雜滑稽之語以演其說。実使人抱腹絶倒。）岡本韋庵愛国説（就千島新論）。岡本氏説慷慨淋漓、使人泣滿堂同感拍手喝采。：

と、友人と連れだつて重野成斎^{*1}、高島嘉右衛門^{*2}、岡本韋庵^{*3}などの講演を聴きに出かけ、

*1 重野成斎：文政十年（一八二七）～明治四十三年（一九一〇）。名は安釋、字は士徳、成斎は号。昌平黌に学び、塩谷宥陰、安井息軒などの教えを受ける。維新後、修史館につとめ、のち帝国大学教授。斯文黌でも教授し、復斎も受講している。

*2 高島嘉右衛門：天保三年（一八三二）～大正三年（一九一四）。実業家、易断家。二松学友会会員。実業家として様々な事業を興し、そのひとつ愛知セメント（熱田セメント）には明治二十年代の二松學舎で副幹事、助教をつとめた速水柳平が番頭をつとめた。

*3 岡本韋庵：天保十年（一八三九）～明治三十七年（一九〇四）。通称は文平。号は韋庵。開拓使判官として樺太開拓に務め、のち台湾総督府国語学校などで教鞭をとる。

八日 微陰。写孟子洪然章或問図解。在塾

と、「孟子洪然章或問図解」、すなわち山田方谷『孟子養気章或問図解』を写し、また同月十一日は、

十一日 晴。午後聴西村茂樹良心論、黒川真頼古代婦人之

装之演説於上野学士会院。聴者一百有余人。中洲先生、重野成斎、及加藤文学博士等亦会焉。：

と、西村茂樹*4、黒川真頼*5の講演を聴きに出かけている。

*4 西村茂樹：文政十一年（一八二八）〜明治三十五年（一九〇二）。名は鼎、字は重器、泊翁と号す。「明六社」に参加し、東京修身学社（のちの日本弘道会）を創設し、国民道德の普及に努めた。

*5 黒川真頼：文政十二年（一八二九）〜明治三十九年（一九〇六）。名は別に寛長、荻斎、万里と号す。黒川春村に学び、のち養子となって黒川家の学統を継承。

また翌十一月には、

一日 観菊華花於团子坂。夜帰寓。晴

二日 晴在塾

三日 拝観観兵式於青山練兵場。天皇陛下皇子殿親臨。

と、観菊や観兵式に出かけ、

廿一日 微陰。聴長三洲演説於斯文齋（其論題正其道不謀其利 其義不計其功）。夜有茶話会。

と、斯文齋にて長三洲*6の演説を聴きに行くなど、向学心と好奇心に満ちた様子が窺える。

*6 長三洲：天保四年（一八三三）〜明治二十八年（一八九五）。名は莢。文部官僚として日本の学制の礎を築いた。明治書家の第一人者。

斯文齋は、明治十三年（一八八〇）、岩倉具視（一八二五）

一八八三）が、谷干城（一八三七〜一九一一）、川田蕪江（一八三〇〜一八九六）、重野成斎らと設立趣意書を作成し、主に宮内省からの支援を受けて発会した斯文学会により創設された学校で、四書五経、唐宋八大家文など各種漢学の講義が行われた。復斎も上京して二松學舎に入塾した直後、同二十四年（一八九一）頃より受講しており、旧蔵資料には同年から三十年（一八九七）までの各種講義筆記が残されている¹³。斯文学会からは明治十四年（一八八一）から同十九年（一八八六）までの講義筆記（第一号から第六十九号）が刊行されているものの、復斎が受講した時期のものはなく、この復斎の講義筆記は貴重なものである。

続く二十六年（一八九三）から二十八年（一八九五）にかけての日記には次第に日々受講した講義の記述が増える。とりわけ『為春堂日誌』と題された二十八年四月から翌二十九年四月の日記は聴講の記述が詳しく、この時期の二松學舎の講義状況、また塾生の日常が察知される。二松學舎の学科課程が「尋常部」「高等部」の二部に分けられた頃である。たとえば二十八年四月の記述は、

一日 朝四時起。六時半至七時半、聴久保塾頭*7論語講義、七時半至八時半、聴中洲先生易経講義。午後二時列八家文輪講席、右了。閱永見某文稿。五時半行有信館*8、九時帰塾。読八家文、十一時就寝。終日晴天夜亦星滿天。

二日 朝四時起。不上中洲先生韓非子講筵。五時半行有信館、九時半帰塾、十二時就寝。：

三日 四時半起。六時三十分至七時三十分聴久保塾頭*7論語講義、七時三十分至八時三十分列八家文輪講席。：五時五十分頃有信館二赴き、九時帰塾、十二時就寝。：尚在寝中読論語先進篇。

四日、三日夜ヨリ徹夜、：四時半燈ヲ滅シテ眠ニ就ク。六時半起、聴久保幹事*7論語講義、七時半至八時聴中洲夫子詩經講義。

とある（傍線は引用者、以下同）。

*7 久保塾頭・久保幹事：久保檜谷。文久元年（一八六一）昭和十七年（一九四二）、名は雅友。明治十六年（一八八三）に二松學舎に入塾しのち塾頭、幹事となり、同十七年（一八八四）から同二十九年（一八九六）まで講義を担当した。

*8 有信館：神道無念流の剣術道場。厳しい稽古で知られ、復斎は後年まで定期的に通っていた。なお細田劍堂もこの門人で、皆伝を受けている。

これによれば、毎朝四時から四時半には起床し、六時半から始まる講義、輪講に出席し、夕刻からは剣術の稽古に励み、帰塾後は読書、就寝は十一時半から十二時、時には徹夜して読書、という規則正しく勤勉な毎日を送っていたことがわかる。

この頃より斯文齋（斯文学会）での聴講についても記され、

八月の日記（『為春堂日誌』）では、

廿六日 朝五時起、七時聴詩經講義。午後、斯文学会二至り、会ノ事ニ就テ開会ノ日等ヲ問フ。：

と、会の詳細を問い合わせ、その後、

（九月）十六日 四時半起、七時半聴詩經講義。三時、聴南摩羽峯詩經於斯文学会。四時半帰塾。：

十七日 五時起、七時半聴近思録講義。午後三時聴論語講義（根元通明）於斯文学会。：

十八日 五時起、七時半聴荀子講義。午後三時聴土屋鳳州近思録講義於斯文学会。：

とあり、基本的に朝に二松學舎での講義を受け、午後三時から斯文齋での各種講義を受けていた。この時期の講義については『斯文齋講義筆記』としてまとめられている。¹⁴

一塾生として二松學舎で学んでいた復斎であるが、二十八年（一八九五）九月十三日、「坐長」となり、その約一月半後には、三島中洲より房長兼助教として作文課担当の命を受けた。それについては日記（『為春堂日誌』）に、

（九月）十三日 …此日坐長命セラレ、講堂二階坐長室ニ移ル。

（十一月）二日 午前九時謁中洲先生、受房長囑託之命、并作文課受持之命。

とある。助教就任後も、

廿一日 聴韓非子講義。午後三時至四時、受持作文課出席。……

二十二日：午後三時受持復文課出席。

二十六日：作文課受持出席。

卅日 朝聴詩経講義。正午至一時受持白文訓点課出席。……とあり、午前中は従前通り各種講義を聴講し、午後には作文課のほか復文課、白文訓点課を担当していた。

明治二十六年（一八九五）十二月、山田濟齋（一八六七～一九五二、名は準、字は士表、二松學舎専門学校校長）、池田蘆洲（一八六四～一九三三、名は胤、通称四郎次郎、二松學舎助教）、西村越溪（名は豊）、児島星江（一八六六～一九三一、名は献吉郎、京城帝国大学教授）四氏により詩文結社「行余文社」が興された。同社は毎月、中洲、川北梅山（一八二三～一九〇五、名は長颯、字は有孚）を迎えて開会され、社員には、石崎謙、宮内黙藏、久保檜谷（雅友）、本城問亭（佐吉）、池田精一、河合（久保）輓次郎らがあり、復斎も参加している。¹⁵ それについては日記にも散見し、たとえば明治三十一年（一九〇〇）の日記（『戊戌十一月日誌』）に、

（十一月）十日 ……直赴遠州樓行余文会。此日諸子不
会、僅本城池田胤二君。会耳乃不開文会而散云。

とあり、明治三十三年の日記には、

（五月）十三日 下後開行余文会于牛門神楽坂。池蘆州輪

番幹事。会者中洲先生、小櫃鶴城、本城鷹峰、中島筑山、三島士胖、三島雷堂*、及余。

* 池蘆州（池田蘆州）、小櫃鶴城（守衛）、本城鷹峰（實）、中島筑山（幹事）、三島士胖（廣、一八七一～？、中洲二男、二松學舎助教、初代舎長）、三島雷堂（復、一八七八～一九二四、中洲三男、二松學舎第二代舎長）。

と、会合の様子が記され、旧蔵資料には「行余文社」の用箋を使用した写本が残されている。¹⁶ また山田濟齋の遺稿にも同じく行余文社の用箋を使用した詩文稿があり、池田蘆洲、復斎、久保雅友、細田劍堂、中洲など複数者の批語が朱、緑、紫など各墨色別に入れられている。

明治三十年（一八九七）、七月十七日より九月五日までの十日間、細田劍堂が設立した静観書院の夏期講習会が箱根で開かれ、復斎はその講習員となった。¹⁷ この夏期講習については旧蔵資料に講義録が残されている。¹⁸ そして同年、復斎は静観書院の幹事となるべく二松學舎を「退舎」したが、¹⁹ 同三十二年（一八九九）頃には復籍している。²⁰

二松學舎主体の夏季講習会は、同三十四年（一九〇一）に開講が決められ、規則、委員、学科、担当講師などが定められ、復斎は幹事をつとめた。²¹ 前述したように、この頃より二松學舎では教員免許の法律改定、漢文科存廃問題の影響による入学者の減少などへの対策として、文検のための「受験科」が設けら

れ、夏期講習もそれに伴うものであろう。なお、既述の通り、漢文科存廃問題に際して二松學舎では貴衆両議院に請願書を提出したが、復斎もまた別に同郷の有志と議会に請願書を提出しようとしていたようである。²²

復斎は「退舎」したものの二松學舎での講義の聴講、作文課などの担当は継続しつつ、明治三十一年（一八九八）頃より鍋島家（詳細未詳）へ出講している。²³次第に聴講することは少なくなつたのか、同三十三年（一九九〇）の日記には、鍋島家への出講や二松學舎の自身の受持課の講義状況、文献の書写、また行余文社の会合の記述が中心である。

明治三十五年（一九九二）前後に塾頭となつた復斎であるが、同年七月には、渡清の理由は定かではないが突如清に渡り上海周辺を漫遊した。その際体調をくずし一旦帰国すると、湯治のため長崎で過ごし、再び渡清すると上海に居を構えた。翌三十六年には帰国し、九州四国を跋涉したのち東京には戻らず郷里涌谷に隠棲した。²⁴

しばらく郷里で過ごしていた復斎であったが、明治四十五年（一九一二）に備前・閑谷中学校に赴任し、約一年間教鞭をとつた。²⁵その後郷里に戻るも大正四年（一九一五）から同七年まで阿波・富岡中学校に赴任し、帰郷後十年にその生涯を閉じた。²⁶

これら事績を見ると、復斎は塾生として、また助教、講師と

して、さらに房長、塾頭、各種委員、役員として明治期の二松學舎において主要な人物と言つても過言ではないであろう。よつてその旧蔵資料は明治期における二松學舎の漢学教育を考察する上で好材料と言える。

翻つて漢学者として復斎の生涯を顧みるに、在塾中は斯文齋も合わせ熱心に講義を筆記、整理し、その後も二松學舎においては助教から各種委員、塾頭として少なからず活躍したにも関わらず、同時期の二松學舎の講師陣に比し、現在その名を知る者は多くはない。

塾頭になつたにも関わらず、突如上海に渡り、その後は二松學舎はもとより東京には戻ることはなく、一時期教鞭をとつたものの郷里に隠棲したことについては、単に復斎の個人的事情によるものか、あるいは当時の教育界、社会状況などの影響があるものか、さらに一考の余地がある。

（二）旧蔵資料

復斎の旧蔵資料は、一括して市場に出されていたものを二松學舎大学S R Fの一環として収集したもので、その数約三六〇点。分野別では、漢籍類（漢籍、漢籍和刻本、漢籍邦人注釈書）一二五点（経部五十七点、史部十五点、子部十八点、集部三十五点）、各種講義筆記、文稿など草稿類約九十点、その他

邦人著作類一四五点（漢詩文・漢学関係資料六十八点、史書二十四点、その他五十三点）となっている（拙編「二松學舎大学SRF加藤復斎旧蔵資料目録（稿）」参照）。

漢籍類については、概ね復斎の二松學舎在籍時期である明治二十年代後半から三十年代前半の学科課程（別表参照）を反映し、四書五経はじめ、史書に『史記』『十八史略』『元明史略』など漢籍と『日本外史』『日本政記』『皇朝史略』『大日本史』など日本史、子書に『荀子』『近思録』『伝習録』『韓非子』『孫子』『老子』『莊子』など、詩文集に『文章軌範』『唐宋八家文』などがあり、それに付随して各々講義筆記がある。但し「――講義」などと題されているものは少なく、その記述内容から講義筆記、講義録と判断されるものも多い。

復斎の講義筆記にはその記述の形態により三種に大別される。①受講時に筆記したもの、②受講時に既存の版本の欄外行間に書き入れたもの、③受講時の筆記を後日整理しあらためて一書としたもの、である。③の整理本については、復斎が二松學舎で実際に受講した講義に加え、それと併行して受講していた斯文学会での講義など別の複数の講述者による講説、さらに自身の知見、見解などが補記されているため、講義筆記の域を超え、復斎編輯の言わば独自の注釈書となっている。またその整理本からは、二松學舎での具体的な講義内容は当然ながら復斎の同時期の受講状況、さらに学習動向が推察される。

そのほか注目すべき資料として三島中洲の講述を復斎が輯録した『詩集伝私記』が挙げられる。該書は中洲の各種漢籍注釈書「私録」のひとつ『詩経』の「私録」である。

「私録」は中洲の講述を門人が校訂、輯録したもので、『詩経』のほか久保崑（河合崑次郎、生没年不明、二松學舎助教、塾頭。）による『周易私録』『尚書私録』『大学私録』『中庸私録』『老子私録』、那智惇斎（一八七三～一九六九、通称は佐典、また佐伝、二松學舎助教、房長）による『論語私録』、そして久保と那智による『孟子私録』があり、明治三十八年（一九〇五）に全三十八冊が完成した。なお各私録の書名「私録」は当初は『詩集伝私記』と同じく「私記」に作っていたようで、各諸本に「私記」の「記」を「録」に訂正しているものが散見する。

『詩集伝私記』は朱熹集伝に鄭玄箋、孔穎達疏など中国諸注を折衷し、また仁井田南陽（一七七〇～一八四八、名は好古）の『毛詩補伝』、中井履軒『詩経雕題略』から多く説を引いた注釈書で、刊行はされておらず複数の伝写本が現存し、復斎の旧蔵資料にも自筆本が二点ある。

中井履軒（一七三二～一八一七、名は積徳）は、中洲とは直接の師承関係にあるわけではないが、中洲の師山田方谷が江戸遊学時に入門した佐藤一斎が大坂懷徳堂で履軒に学んでおり、その学統に連なる。履軒は第二代学主中井斃庵の子として大坂

に生まれ、五井蘭洲に師事し、のち大坂・和泉町に学塾水哉館を開き、兄竹山の死後は第五代懷徳堂学主となった。

『詩経雕題略』は『七経雕題略』のひとつで、『詩経』のほか『周易』『尚書』『春秋左氏伝』『礼記』『論語』『孟子』があり、刊行は『礼記』のみでその他は写本で伝わる。中洲は四書の注解にあたって履軒説を多く引いている。復斎にも『詩経』『春秋左氏伝』『論語』『孟子』各雕題略の写本があり、参考文献のひとつとしていたのであろう。

復斎自筆『詩集伝私記』のうち一本は処々復斎の訂正が入った校本で、該本には「三島毅遠叔著／加藤信義卿輯録」と編著者事項が明記されている。諸本には編著者事項がないためこれまで本書の輯録者は不明であったが、復斎旧蔵資料の出現により輯録者が「加藤信」すなわち復斎であることが判明した。この点でも重要な一本である。

三、明治二十年代後半から三十年代の漢学講義

明治二十年代後半から三十年代の学科課程は「一、明治期における二松學舎」で示したように各修学内容別により尋常部に「素読」「講読」「訓点」「訳文」「作文」、高等部に「経書」「歴史」「子集」「文法」「文章」「詩賦」「古典」の課目が設けられ、各課目にはおのおの講義にあたって用いられた文献が定め

られていた。尋常部では「素読」「講読」の教材に用いられた文献も高等部ではあらためて各内容別に学ばれることとなり、それらを高等部の課目別に一覧にすれば【表3】の通り（各課目内の文献は学科課程での講義実施年次順）。これらの文献については、復斎の旧蔵資料にも講義時に用いたと思われる書人本や各種講義筆記が数多く残されるが、以下、それらの中から特筆すべき資料について課目別に詳解していく。

(一) 経書

① 四書

四書に関する復斎の講義筆記のひとつに、朱熹『四書章句集註』（闕「中庸」「論語」卷九、十、天保八年（一八三七）大坂河内屋喜兵衛刊江戸後期後印本）の書人本がある。

該本は、京都の小松太郎兵衛が寛文十一年（一六七二）に小本（縦約十七センチ横約十二センチ）として刊行した『四書集註』の後印本で「小松版四書」とよばれる。小松版ははじめ小本で刊行されたが、のちに倍の大きさの料紙に刷られた半紙本（縦約二十四センチ横約十七センチ）が通行した。小本用の版木で刷られ半紙本は、匡廓外の余白が多くなり書人に適していたため、当時の二松學舎では四書の定本として用いられていたように、中洲手沢半紙本「小松版四書」があるほか、その三男

【表3】

明治二十九年「二松學舎規則」学科課目講義用文献

老子	伝習録	管子	莊子	荀子	近思録	呉子	孫子	韓非子	唐宋八家文	小学	文章軌範	子集	宋元通鑑	資治通鑑	大日本史	史記	皇朝史略	元明史略	日本政記	日本外史	十八史略	歴史	周易	書經	詩經	中庸	左伝	大学	論語	孟子	經書
												尋常部「素読」								第一年第一期	尋常部「素読」	第一年第二期(五経)	第一年第一期(四書)	第一年第一期(四書)	第一年第一期(四書)	第一年第一期(四書)	第一年第一期(四書)	第一年第一期(四書)	第一年第一期(四書)	第一年第一期(四書)	尋常部「素読」
										第二年第二期	尋常部「講読」									第一年第三期	尋常部「講読」										尋常部「講読」
第三年第二期	第三年第二期	第三年第一期	第三年第一期	第二年第二期	第二年第二期	第二年第一期	第二年第一期	第二年第一期	第一年第一期			高等部	第二年第一期第三期	第二年第一期第二期	第一年第一期第二期						高等部	第三年第二期	第三年第一期	第二年第一期	第二年第一期	第一年第二期・第二年第一期	第一年第二期	第一年第一期			高等部

復や復斎と同時期に二松學舎に在塾した松浦鳳之進（生没年未詳、旧姓小林氏、名は精。二松學舎幹事、助教）にも同様の書入本が残る。

復斎の講義筆記書入本は、明治二十四年（一八九二）頃の二松學舎での中洲、および久保檜谷の講義を基本としたもので、二氏の説のほか諸家諸説が朱墨藍の三種の筆により匡廓外、欄外に詳密に書入れられている。

引かれた諸家は、中井履軒（『論語雕題』『論語逢原』）や猪飼敬所（一七六一―一八四五、津藩儒、『論孟考文』）、また室鳩窓（一六五八―一七三四、『論語集註広義』）、佐藤一斎（一七七二―一八五九、各種四書欄外書、『古賀精里（一七五〇―一八一七）、塩谷宕陰（一八〇九―一八六七）、安井息軒（一七九九―一八七六）ら昌平覺教授陣、および安部井斐（一七七八―一八四五、陸奥会津藩藩士）、大槻平泉（一七七三―一八五〇）、陸奥会津藩藩士）などそこに学んだ人々、そして重野成斎（一八二七―一九一〇、名は安釋）、島田篁村（一八三八―一八九八、名は重礼）、田中従吾軒（一八二二―一九〇〇、名は參）ら斯文覺教授陣、そのほか帆足万里（一七七八―一八五二、『論語標註』）など二十数家にのぼり、昌平覺、斯文覺関係者が中心である。また「信案…」と復斎の見解も書入れられている。

これら諸家諸説は中洲、あるいは久保が講義中に引いたもの

のほか、復斎が補記したものもあると思われる、その区別は未詳であるが、復斎は二松學舎の講義と併せて斯文覺の講義も聴講していたことから、斯文覺関係は復斎の補記の可能性が高い。

一方、中井履軒、猪飼敬所、佐藤一斎、塩谷宕陰など中洲と師承関係にあたる諸家、また昌平覺関係諸家は中洲の講述中のもので、中洲が先学の説を引きつつ講義していたと窺測される。

また中洲の講述として「一大段：」「一小段：」と書入があるが、これは中洲の漢文読解にあたり基礎とした方法「段解」を示すもので、中洲は文章をまず大段落、小段落に分けて各段の要旨を整理しつつ読解していったことがわかる。

復斎の四書の講義筆記はその他にも個々にあり、たとえば『孟子』には明治二十八年（一八九五）から三十一年（一八九八）頃の中洲の講義が講義時の筆記本とその整理本がある。その整理本の本文は中洲の「私録」のひとつ『孟子私録』と重なり、匡廓外には朱墨にて「一段：」「二段：」と「段解」され、中洲の講義が記されている。

②五経

五経の講義筆記のひとつ『尚書講義筆記』は、明治二十五年（一八九二）から同三十年（一八九七）頃までの複数の講述者の講義について、復斎が受講時に筆記後あらためて篇ごとにとめたものである。講述者は明治二十五年代が中洲、あるいは久保檜谷、同二十六年、二十八年が島田篁村、同三十年が細田劍

堂で、島田の講義は斯文齋で受講したものである。既述の通り復齋は二松學舎での講義と斯文齋での講義を併行して受講しており、それら各者各篇の講説を整理し、多角的に理解していった態度がうかがえる。

『詩経』の講義筆記には、その講義年が明確なものに明治二十七年から翌二十八年（一八九四〜九五）、同三十二年（一八九九）の筆記があるほか前掲の四書と同じく版本への書入れたものがある。

書入本は朱熹『詩経集註』（江戸期刊本）に中洲の講説を書入れたもので、毛伝、孔疏など中国諸注が引かれ、日本では仁井田南陽『毛詩補伝』、中井履軒『詩経雕題略』からの引用が散見するほか、中洲の按語があり、これらは前出の『詩集伝私記』と通じる。それは『孟子』の講義筆記と「私録」の関係と同様にして、中洲の講説と「私録」が密接に関係していることを示すものである。

（二）歴史

「歴史」は、中国と日本とに関わらず一つの課目として扱われ、復齋の旧蔵資料には『史記』『日本外史』『日本政記』のいずれも中洲の講義の筆記が残る、但しこれらは【表3】の課目によれば正確には尋常部の「素読」（『日本外史』）、「講読」

（『史記』『日本政記』）であるため、講義の趣旨としては歴史自体を学ぶというのではなく漢文の読解が中心であった。

『史記』には、復齋旧蔵資料に『史記論贊』『史記論贊鈔』『史記講義』『史記論贊講義』と様々に題された講義筆記が残されているが、「論贊」と付しているように、その講義は司馬遷の論贊部分を抜粋しそれに特化したものであった。

復齋筆記の『史記』講義筆記には講義時に筆記した覚書のよくな断片的なものからそれらを後日清書した整理本など複数ある。講義時期はあまり明確ではないが、なかで「明治二十五年三月念五初講」と明記されているものがあり、概ね明治二十五年（一八九二）頃からそれ以降の筆記と思われる。講義筆記は論贊を本文としてその眉欄行間に講説が書入れられたかたちで整理され、「主意……」としてはじめにその項の主意を掲げ、次いで「一段……」「二段……」とあり、前掲の講義筆記類と同様に「段解」の方法がとられていたことがわかる。中洲には『史記論贊段解』という著書があり、講義はそれにつながるものであろう。

また講義筆記中には斯文齋で講師を務めた豊島洞斎（一八二四〜一九〇六、名は毅）の説が引かれていることもあり、ここでも復齋が二松學舎での講義と斯文齋での講義を折衷して理解しようとしていたことがうかがえる。そしてそれらはさらに整理され『史記講義』『史記論贊講義』として一書を成した。そ

の成稿時期は復斎の筆蹟から既に課程を修了して教授側の立場になっていた明治三十三年（一九〇〇）頃と思われる。

『日本外史』『日本政記』も同様にして、いずれも編者頼山陽（一七八一〜一八三二）の叙論、論賛部分を抜粋し、それに対して注解していくもので、復斎の旧蔵資料にはその講義筆記『日本外史論賛』がある。『日本政記』講義筆記については中洲の二男廣の録した『日本政記論文段解』が伝わる。

(三) 子集

① 子書

復斎の講義筆記には『荀子』『近思録』『伝習録』『韓非子』『老子』『莊子』がある。なかで『荀子』『韓非子』に詳密な書入のある版本がある。

『荀子』は、唐楊倞注・清謝墉箋釈・日本朝川鼎校『荀子箋釈』（文政十三年（一八一六）江戸和泉屋金右衛門刊本）に主として中洲の講説を朱墨二筆で書入れたもので、復斎の日記によれば中洲の『荀子』講義は明治二十八年（一八九五）四月に開講している。朱筆にて「一段……」「二段……」と段落分けが示され、また墨筆にて中洲の講述のほか岡松甕谷（一八二〇〜一八九五）の説が多く引かれているが、その典拠は明らかではない。

岡松は昌平黌、斯文黌で講義をしていることから、あるいはそれらの講述かもしれない。

『韓非子』書入本は津田鳳卿述・山内鈍等録『韓子解詁』（明治期大阪小林伊兵衛後印本）に明治二十六年から二十七年（一八九三〜九四）頃の中洲の講義を書入れたもので、これもまた「第一大段……」と段解の方法をとっている。『韓非子』の課目は「子集」に位置づけられ、漢文読解の基礎よりも内容解釈が中心となる講義であるが、やはり中洲の講義では読解にあたってまずは段解から始まったのであろう。

② 詩文集

復斎旧蔵資料には「講読」課目の『文章軌範』、「子集」課目の『唐宋八家文』が版本から各種講義筆記まで多種多様に残されている。

『文章軌範』の版本のひとつ宋謝枋得輯・明鄒守益輯統編・日本松井暉辰校『増纂評註文章軌範』（寛政八年（一七九六）大坂渋川与左衛門等刊本）には、眉欄、行間に朱藍墨緑の多彩にして詳密な書入がある。それらは明治二十年代後半から同三十四年（一九〇一）頃まで復斎により漸次補記されていったもので、中洲の講説を中心として四屋穂峰（一八三〇〜一九〇六、名は恒之）、森田節斎（一八一〜一八六八、名は益。字は謙蔵）、川田甕江など諸家の説が色別になっている。また本

文には久保檜谷が考案した読解のための訓点符が付されている。四屋の講説は明治二十六年（一八九三）、復斎が斯文齋にて聴講したもので、その講義筆記も残されているが、中洲、四屋など異なる講義筆記や諸家諸説を一覧にすべく、随時版本に書入れたものと考えられる。そしてのちに復斎はそれら諸家の講義筆記や諸説を整理し一書としてまとめ、結果的にそれは復斎編纂の新たな注釈書と言えるべきものとなった。

『唐宋八家文』も同様にして版本への講義筆記書入がある。それは清沈徳潜評点・山崎楽訓点・宮本知雄校『唐宋八家文読本』（明治十九年（一八八六）東京敬業書院鉛印本）に書入れたもので、朱筆による中洲の段解、講説を中心として、墨筆にて久保檜谷の説など諸説を引いている。

『唐宋八家文』の課目もまた前出の『莊子』と同様に、基礎的な「素読」「講読」ではなく「子集」であるが、やはりまずは段解の方法により読解していったことがわかる。

おわりに

明治期における二松學舎の漢学教育については、まず学科課程を辿っていったが、それは創立時から常時改定が繰り返され、それを当時の教育制度に鑑みると、常にその変革の影響を受けてそれに関連したものであったことが看取された。

明治二十年代後半から三十年代の漢学講義については、加藤復斎旧蔵資料により経書、歴史、子書、詩文集の別に中洲の講義を中心としてその具体的な内容を詳察していったが、概括すれば講読にあたってはいずれもはじめに章全体を段落に分け、続いてその段落ごとに読解して各段落の主意をつかんでいくという「段解」という方法がとられていた。中洲の「段解」については、これまで『史記論贊段解』『日本外史論文段解』『日本政記論文段解』が知られるが、復斎の講義筆記により、経史子集全てにおいてまずは「段解」を基本としていたことが明らかとなった。それにより当時の二松學舎の漢学教育の方針が、内容の解釈、考証というよりはまずその前提として正確な漢文読解能力の習得を目的としていたことが言える。

参考文献

- 『二松学友会誌』
- 『二松学報』
- 『二松學舎六十年史要』（二松學舎、一九三七）
- 『二松學舎百年史』（二松學舎、一九七七）

注

- 1 明治二十九年（一八九六）三月、二松學舎進展のため、在学者、出身者を会員として二松學舎学友会が発会し、『二松學友会

誌」は毎年春秋二回発行された。「二松學舎学友会規則」には「會員の消息を通し及び二松學舎時々の状況を報告する為め会誌を發行す」とある。掲載事項として同規則には「中洲先生及び二松學舎状況」「會員の住所職業其他一切の消息」「中洲先生及び會員の詩又論説」を挙げ、毎号三島中洲はじめ會員諸氏の詩文と消息、および二松學舎の近況を掲載する。第四十一輯（大正八年（一九一九）まで続き、その後は『二松学報』として発刊）。

2 「教則」は「四書 五經 左伝 史記 資治通鑑 十八史略 元明史略 唐宋八大家文 文章軌範 日本史 日本政記 日本外史 国史略 西洋各国歴史及び經濟法律等ノ翻譯書」とある。

3 明治五年（一九七二）八月二日太政官第二一四号。

4 『二松學舎百年史』（二松學舎、一九七七）一二四頁。

5 『二松學舎六十年史要』（二松學舎、一九三七、以下略『六十年史要』）「明治十一年」の項に「二月 学則を改め全課を第一、第二、第三、第四の四級に分ち更に各級を三課に分ち先生の講義は書經、莊子、文章軌範とし、之を各級共通に聴講せしむ、但し第四級の二課及三課は素読を主とす。輪講は論語、春秋左氏伝、唐宋八家文等にして第三級終了者以上を主とす。先生の講義は毎日午前午後各一回とす。」とある。

6 翌十三年十一月改正版では第一級第二課の大学が除かれ、第一級第一課から詩經が移っている。なお、『六十年史要』「明治十二年」の項には「此月本学舎は四級制を三級制に改む、各級毎に之を三課に別つこと旧の如し。」として、以下の「課程表」を掲げるがその典拠未詳。

三級第三課 日本外史、日本政記、十八史略、国史略、小学。

三級第二課 靖献遺言、蒙求、文章軌範。

三級第一課 唐詩選、皇朝史略、古文真宝、復文。

二級第三課 孟子、史記、文章軌範、三体詩、論語。

二級第二課 論語、唐宋八家文、前後漢書。

二級第一課 春秋左氏伝、孝經、大学。

一級第三課 韓非子、国語、戦国策、中庸、莊子。

一級第二課 詩經、孫子、文選、莊子、書經、近思録、荀子。

一級第一課 周易、礼記、老子、墨子、明律、令義解。

但し詩、文章は共通とす。

7 『六十年史要』「明治十七年」の項に、「一月、級課制を廢し、一、二、三級制とし、左の課目を課す。」として、課目を列記する。

8 『二松學舎百年史』一八三頁～一八五頁参照。

9 『二松學舎百年史』一九〇頁。

10 『二松學舎百年史』一八六頁。

11 安政四年（一八五八）～昭和二十年（一九四五）、名は謙蔵、劍堂は号、また別号東郷。二松學舎で講師、塾頭、幹事をつとめ、明治三十六年（一九〇三）に設立された二松義会では中心としてその開設に尽力したが、後年は二松學舎と距離を置いた。二松學舎のほか、斯文学会、大東文化学院、東京高等師範学校、東京女子高等師範学校などでも教授した。また剣道の達人としても知られる。

12 当該期間中の日記は断続的なもので、覚書として用箋のままのもの、それらを整理し清書して仮綴したものなど、その状態、記述時期の別により以下の八点がある。

①自明治二十四年（一八九二）九月一日至三日、自同年十月一日至十一月三十日。仮綴六丁。十月十一月記事は②と重複。②の草稿版。

②自明治二十四年（一八九二）十月一日至明治二十五年三月一

日、自同年十月一日至十一月二十七日（十六丁）、首題「在京日誌」、また白葉二丁をはさんで自明治二十七年一月一日至三十日（八丁）、仮綴全二十五丁。明治二十四年十月、十一月記事は①と、明治二十五年記事は③とおのおの重複。①③の清書版。

③明治二十五年一月、二月、十月、十一月、自同年十二月二十九日至明治二十七年一月九日。零葉七枚（用箋三種）。①の草稿版。

④明治二十六年一月、二月、四月、（十二月）、某月。一月の丁の首に「明治二十六年日記」とあり。零葉八枚（用箋三種）。

⑤自明治二十七年十二月一日至明治二十八年一月九日。零葉四枚。『為春堂日誌』。全五十二丁。他の時期の日記が仮綴、あるいは用箋のままの教葉に対し、本日記は小型の横長本で表紙が付され、打付書で「為春堂日誌」とある。おそらく記録後あらためて清書したものであろう。

⑥自明治二十八年四月一日至明治二十九年四月二十三日。外題『為春堂日誌』。全五十二丁。他の時期の日記が仮綴、あるいは用箋のままの教葉に対し、本日記は小型の横長本で表紙が付され、打付書で「為春堂日誌」とある。おそらく記録後あらためて清書したものであろう。

⑦自明治三十一年十一月十日至十二月四日。首「戊戌十一月日誌」。零葉二枚。

⑧自明治三十三年五月十三日至十月八日。六月の丁の首に「負笈日録」とあり。仮綴二十四丁。

13 講義筆記によれば斯文会で聴講した講義は以下の通りで、③から⑨の講義については復斎の日記にも記され、『斯文齋講義筆記』としてまとめられている。

①明治二十四年（一八九二）十一月から同二十七年（一八九四）十二月の島田篁村述『中庸』講義。

②明治二十六年（一八九三）十月の四屋穂峰述『文章軌範』講義。

③明治二十六年（一八九三）十月、同二十九年十一月の重野成斎述『周易』講義。

④明治二十六年十月から十一月の川田甕江・岡松壘谷述『礼記』

講義。

⑤同前、萩原西疇（裕）述『春秋左氏伝』講義。

⑥明治二十六年十月から同二十九年二月までの根本羽嶽（通明）述『論語』講義。

⑦明治二十七年十月の田中從吾軒（參）述『老子』講義。

⑧明治二十八年九月十月の南摩羽峯（綱紀）述『詩経』講義。

⑨明治二十八年九月から三十年十一月までの土屋鳳洲（弘）述『近思録』講義。

14 前掲注13参照。

15 『学友会誌』第一輯（明治二十九年）に「○行余文社 二十六年の末、山田準、池田四郎次郎、西村豊、児島献吉郎の四氏に因て興され、爾來社員漸次増加し時に出入りありしかども、今日に至るまで毎月夫子及び川北梅山翁を迎へて之を開き、一回も欠けしことなく現時の社員は左の如し／石崎謙 宮内黙藏 久保雅友 本城佐吉 池田精一 河合輓次郎 加藤信太郎 三島廣 藤波暉 西村豊 児島献吉郎 池田四郎次郎 山田準／右の外吹野信履、平井頼吉、斎藤次郎の諸氏も社員たりしが吹野平井の二氏は今台湾に在り斎藤氏は伊勢に帰任せられたり」とある。

16 明治三十一年（一九九〇）に書写した諸家撰述漢文についての講義筆記、同三十三年に書写した猪飼敬所『孟子考文附録』の二点。版心下部に「行余文社」とある。なおこの用箋については、

明治三十三年（一九九〇）九月二十三日の日記に「來行余文會用箋紙五帖。兼テ注文シ置シ者出来、持參セラレシナリ。」とある。

17 『学友会誌』第三輯（明治三十年）に「静観書院夏期講習會同院は細田謙蔵氏の設立に係る。今夏氏は門下生を募り講習會を

函根山中に開かれたり。八月十五日会員山田福沢の二子往き訪ねし時など氏は講書に擊剣に勇氣溢る、許りにて四肢の肥満体重の増加等天狗顔に誇り居られたり。今講習員加藤信太郎氏より左の一篇を寄せられたれば之を録す。／今夏七月十七日より九月五日まで五十日間夏期講習書を神奈川県箱根山に開き文武二道を講習す。：とある。

18 『孫子』『莊子』の講義録があり、『孫子』の表紙に「丁酉自七月十九日至九月」（丁酉＝明治三十年）「箱根宮城野村静観書院夏季講習所内 復齋学人 信」とあり、『莊子』の表紙に「明治丁酉夏自七月廿日至九月」「於神奈川県足柄下郡宮城野村静観書院夏季講習会所 復齋学人 藤信」とあり。

19 『学友会誌』第四輯に「学舎役員の異動」として、「房長兼助教加藤信太郎氏は細田謙蔵氏の静観書院幹事として退舎せらる」とある。

20 『学友会誌』第七輯（明治三十二年）に「目下助教の職にあるもの」として「三島廣、池田精一、齋藤良一、池田四郎次郎、山田準、久保輓次郎、大森寛、加藤信太郎、永見貞武、山田謙吉」、「役員の職にあるもの」として「房長 加藤信太郎」とあり、また「本会会員訂正名簿」には「二松學舎 講師 加藤信太郎」とある。

21 『学友会誌』第十輯（明治三十四年）によれば以下の通り。
舎則第三章第四条に依り本年初めて夏期講習会を開くことに決せり。本会は年を逐ひ益々隆盛を期する筈にて本年の如きは数名の委員を定め大に準備に尽力せり。規則書左の如し。：
第九条 学科左の如し

国語科

日本文学史 日本文典 十訓抄 枕草子 今昔物語

漢文科

支那文学史 經史子解題 韓非子（拔萃） 孟子（拔萃） 唐宋八家文（拔萃） 史記（拔萃）
会長 文学博士 三嶋毅
国語科受持講師
第一高等学校教授
（姓名イロハ順）
今井彦三郎
落合直文

二松學舎講師

高橋万次郎

高等師範選科卒業

山根勇藏

文科大学生

小豆沢英男

漢文科受持講師

（姓名イロハ順）
池田精一

学習院教授

池田四郎次郎

日本中学校／国民英学会講師

本城實

二松學舎講師

久保輓次郎

暁星学校講師

齋藤良一

青山学院／海城学校講師

宮内默藏

國學院／日本中学校講師

信夫恕軒

幹事

加藤信太郎

幹事

山川早水

明治卅四年七月

東京市麴町区一番町四十六番地

二松學舎夏季講習会

22 『学友会誌』第十輯（明治三十四年）に「○加藤信太郎 氏も郷里の諸同氏と共に請願書を議會へ提出せんとの計画ありき。」とある。

23 明治三十一年（一九九八）の日記（戊戌十一月日誌）に、

- (十一月)二十八日 鍋島方休業○写詩経私記〇…
(十二月)一日 朝赴鍋島(朝赴有信館分教場)、写詩経私記。
とあり、三十三年の日記(「負笈日録」)の六月には、
一日 下午赴鍋島家。公子有事休講。夜金井郁文君来晴。
二日 下午赴鍋島家。夜与小川野村二子訪金井郁文君於飯田街。至城学院共觀三番街夜市…
三日 午前八時赴鍋島家。下午二時半、中野吉甫書到吉甫。…とほぼ毎日出講していた。
- 24 塾頭就任の正確な時期は不明であるが、『学友会誌』第十一輯(明治三十五年)の「會員名簿」に、「二松學舎 塾頭 加藤信太郎」とあることによる。渡清については、
○加藤信太郎 氏は四月中に王父を喪はれ一時帰郷致し居られしも、先月飄然と行李を治め支那に遊ばれたり
とあり、第十二輯(明治三十六年)に、
○加藤信太郎 氏は昨年七月渡清上海附近を漫遊せられしが微恙を得たり。帰朝暫く長崎なる其温泉に入浴せられしが再び渡清の途に就かれたり。其の後消息は未だ之を聞かず。
とあるが、「消息」については「住居異動」項に「清国上海英租界新馬路華安里七〇三翻訳出版会社 加藤信太郎」と掲載されている。そして第十四輯に、
○加藤信太郎 氏は去春清国より帰朝九州四国を跋涉せられ年末に帰郷せられたる由
とあり、「転居」項に「陸前遠田郡涌谷 加藤信太郎」と掲載されている。
- 25 『学友会誌』第二十八輯(明治四十五年)に
○加藤信太郎 氏は久く故山に帰臥せられしも、今春三月備前閑谷巖に聘せられ赴任せられたり。…
- 26 『学友会誌』第三十三輯(大正四年)に、
○加藤信太郎 氏は河野氏辞任の後を襲ぎて阿波富岡中学に赴任せられたり。
とあるも、同誌第三十輯(大正二年)の「會員名簿」には「宮城県 涌谷 加藤信太郎」とあるため、一年足らずで帰郷したのであらう。
- 27 『日本漢文学研究』第13号/二松學舎大学東アジア学術総合研究所日本漢文教育研究推進室/平成三十年三月
「大学」末に「二十四年十月廿五日」とある。
- 28 久保檜谷『論語』講義については、復齋の日記『為春堂日誌』の明治二十八年四月に記され、旧蔵資料にも明治二十八年から二十九年(一八九五〜九六)頃の講義筆記がある。
孟子「講義」(三島中洲述) 加藤復齋録 加藤復齋自筆本 仮綴一冊 復齋526
外題(表紙打付書)「孟子公孫丑上」又「戊戌六月十七日夜草了/二松巖柳北塾 加藤信」(戊戌〓明治三十一年)。
- 29

